

日吉台地下壕保存の会会報

第69号

日吉台地下壕保存の会

賀 春

おか

陸に上がった連合艦隊司令部60年

今年は昭和19年9月29日連合艦隊司令部が木更津沖の巡洋艦大淀から日吉の慶應大学寄宿舎に移転して60年目にあたります。

年頭にあたって

日吉台地下壕保存の会会長

大西 章

日吉台地下壕の保存の会会員の皆様明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひします。

新年を迎えるにあたり、昨年1年間を振り返るとやはり米国・イラク戦争が頭に浮かびます。軍事的に世界で米国1国が強国であることの恐ろしさは当然ですが、情報操作をして偽世論を作り上げ、正義をふりかざし突き進むことの怖さも感じます。昔は情報を隠すことにより世論を操作していたのですが、インターネットなどが進み、今回は意図的に情報を多く流し、世論を形成するようになってきました。特に映像で直接的に情報が入ると、思考が停止した状態で判断するようになります。意図的に作られた人道的(?)な映像を捏造し、しかも繰り返し流せば、正義は我にありと考えてしまう人が多くいることは仕方がないことかもしれません。しかし、そこに横たわる真実は何かということを見抜く力が必要です。現実は考える時間と余裕を与えてくれないかもしれません。しかし、我々は歴史を持っています。歴史から学ぶことが出来るはずです。絶対に許してはいけないことを歴史から学んで来たとはずです。その原点といつも対話をしながら判断をしていかなければ、大きな過ちを繰り返すことになると思います。その意味で歴史の重みを感じさせる地下壕の保存とその活用の大切さがより増してきたと思います。今年もいろいろと取り組まなければいけない問題が山積していますが、自分たちの力量の範囲で確実な活動をしていきたいと思います。皆様のご支援をよろしくお願ひします。



第11回横浜・川崎平和のための戦争展 報告 「日吉キャンパスにみる戦時下の青春」 —学徒出陣60年— 来場者2000人をこえる

晴天に恵まれた2003年10月19日、慶應日吉キャンパスの中でもひときわ人目を引く巨大なガラスの建物、来往舎のギャラリーは、一日中大勢の来場者でいっぱいでした。この日は「連合三田会」という慶應義塾卒業生とその家族が集う、年に一度の大イベントで参加者は一万人を超えたそうです。様々な講演会や演奏会、そして展示会が開かれており、模擬店や売店が軒を連ねていました。今年度の「横浜・川崎平和のための戦争展2003」は連合三田会の企画のひとつと位置づけられ、10月19日から26日まで、来往舎を主な会場として日吉キャンパスで開かれました。

展示のテーマは前回に引き続き「日吉キャンパスにみる戦時下の青春」です。福沢研究センター提供の写真を中心にして、昭和のはじめの20年間、大学という学問の府がどのようにして戦争に巻き込まれていったのかを明らかにしようと試みました。この学園は開設からすでに日中戦争下にありました。昭和18年からは学生は戦場に駆り出され、翌19年から敗戦の日までは学生に替わって海軍が、



横浜・川崎平和のための戦争展 2003
展示会場 慶應義塾大学来往舎

昭和20年の9月から4年間は占領軍であるアメリカ軍が使用していたのです。大学が変わり行く様は写真に残る学生の服装と表情にはっきりと表れています。19日の来場者はほとんどが慶應義塾大学の卒業生とその家族でしたが、静かに熱心に時間をかけて見ている人が多く、この日だけでも2千人以上の方に知つてもらえたことになります。予定していた地下壕見学は壕内の補修工事のため中止となりましたが、関心の高さに心強く思いました。11月と12月に設定した見学申し込みは大盛況でした。

20日から24日までは、展示会場は開けてありました。来往舎は学生にとって入り

にくい場所らしく、宣伝不足も加わってあまり多くの人に見てもらえませんでしたが、何人かの人とじっくり話せたのは嬉しいことでした。

25日午前中のキャンパス・ウォークには10数名の参加者があり、地上部分だけでも十分語り部としての役割を果たしていることを証明しました。午後は中会議室で4人の講演がありました。まず櫻井準也慶應大学助教授の地下壕の考古学的学術調査報告が、詳細な資料をもとになされました。これは一昨年秋、日吉台箕輪艦政本部地下壕調査したもので歴史学以外の観点からの講演は初めてであり、新鮮で興味深い講演会



となりました。

講演会 櫻井準也慶應義塾大学助教授

続いて三人の若者による発表が行

われました。中央大学講師の長谷川曾乃江さんは大学での実際の授業実践を報告しました。二人の学生、一橋大学の岡宏幸さんと慶應大学の藤田大介さんは、真剣に生きる現代の若者らしく、自分の思いと活動を報告し、深い感銘を与えました。毎年この場で数人の若者が自分の考えを不特定の聴衆に訴えてきました。小さなことかも知れませんが、平和な未来を築く一石になっていると自負しています。

最終日である26日は、展示会場を慶應高校の校舎に移し、午前中のキャンパス・ウォークと明治大学山田朗教授の講演「連合艦隊陸に上がる」が行われました。連合艦隊が陸に上がったまさにその場での講演は、この上なく説得力のあるもので、どんな質問

にもたちどころに答える豊富な知識と相まって、意義深いものとなりました。

11月9日に行われた登戸研究所の見学会は15名の参加があり、ときおり時雨もふるなか、化学兵器の研究をしていた跡を歩き、決して過去のことではない現代の問題として感慨を新たにした一日でした。また東部62部隊の見学は風雨が激しく中止となりました。

(運営委員：亀岡敦子)



展示会場 慶應義塾高等学校

若者からの提言（発表者から）

1. 戦争を繰り返さないために・・・ いま出来ること

慶應義塾大学理工学部4年
藤田大介

この度も昨年に引き続き、今年も10月に行われた「横浜・川崎平和のための戦争展」にお声を頂き誠にありがとうございました。まだまだ未熟者ではありますが、未来を担う若者の一人として自分たちの意見を述べさせていただく機会を作っていました主催の日吉台地下壕保存の会の方々にまずは厚く御礼申し上げます。



発表 藤田大介 慶應義塾大学4年生

今から3年前、70年近く古い歴史を持つ日吉キャンパスの波乱万丈の歴史に大変興味を持ち、少しでも日吉の地にまだ残っている戦争遺跡を記録としてカメラにおさめ、一人でも多くの学生にそして世の中に広めていきたいと「わが足の下プロジェクト」を結成、日吉台地下壕にスポットを当てて第1弾となる映画を制作しました。

その後この映画を見た全国の地下壕保存団体から第2弾の制作を切望する意見書が多数寄せられ、この一年で制作に関わる仲間が4人から12人まで膨らみました。それは慶應の学生のみならずインター

ネットを通じて関心を持ってくれた他大学の学生も含まれており、このプロジェクトを立ち上げてから少なからず影響を与えながら広がっているのではないかなど考えられます。

新しい仲間と共に歩んできた「わが足の下プロジェクト」としてのこの一年は、作品制作はもちろん様々な場所に行き、映画の上映、講演会を行ってまいりました。慶應義塾大学のほか、早稲田大学、明治大学、名古屋学芸大学、そして来春には広島にも・・・。次から次へとお声を頂いて、現地の学生に向けて上映させていただきました。「戦争を繰り返さないために・・・」という言葉は、太平洋戦争以降、日本は特に繰り返し唱え続けてきました。それは戦争を通じての痛みや悲しみを、戦争に負けて心の底から感じたからだと思います。

毎回映画を上映する前には会場にいる学生の皆さんに問いかけます。「戦争を繰り返さないようにするには、どのようにしたらいいのだろう・・・？」と。すると返ってくる答えはたいてい、「武器をなくす」だの「政治を整える」だのしかありません。それ

は今僕ら一人一人が今すぐ誰でも出来ることですか?」と改めて問い合わせたい気分にさせられます。

また昨年の7月、環境省後援、三木睦子さんが会長で あられる地球ジュニア国際会議という小中学生の国際会議に参加して同じように質問してきました。難しい知識を持たない子どもたちが発想力でどのような答えを返してくれるのだろう?内心私はわくわくしていました。するとさすがは子どもたち、夢のある答えがたくさん返ってきました。その中で一番感動したのが「将来戦争しないという約束を世界中の子どもたちがいま結ぶ」でした。国境を越えて顔も見えないけれど素敵な友達をたくさん作りたい・・・、夢と希望に燃えている子どもたちのパワーはすさまじいものです。「何を憎みあって戦争したいの?」そう訴えてきたのは小学校3年生の男の子でした。何か難しい理論や思想に流されていつの間にか大人が失ってしまったピュアな心を子どもはまだ持ち続けているのです。隣の子と手を取り合っていけば10年後、20年後・・・この世の中は世界中が友達の輪という素晴らしい時代が築けられそうではありませんか。まさに夢の発想に度肝を抜かされました。

こうした子どもたちの輝く未来のためにも、今私たちが身近なことで出来ることというならば、それは戦争で傷ついた遺跡を後世まで残し、保存する事で、いつでも初心に立ち戻り、昔のことを思い返しながら優しい心で暮らしていくことだと思います。

そして映画製作を通じて私たちは、人々のありのままの姿を記録として残し、これからも更に多くの人々へメッセージとして届けていくお手伝いがしてゆけたら幸いです。

2. 語り継ぐ意味

一橋大学社会学部3年
岡宏幸

－20世紀における最も驚くべき現象は歴史感覚の断絶である－

歴史学者であるエリック・ホブズボームはその著「20世紀の歴史～極端な時代」の中で、いかに歴史感覚が世代によって共有されることなく断絶しているのか、それほどまでに20世紀において社会は急速に変貌を遂げたということをそのように記している。

20世紀とはいからなる時代であったのだろうか。1つの捉え方として「戦争の世紀」であったと形容することが出来るだろう。2度に渡る殲滅戦としての世界大戦、そこに残されたのは一般市民の犠牲そのものでしかなかった。

しかしそこで驚くべきはそのような戦争についての歴史感覚が自分を含めて今の私たちの世代には全く存在していないという1つの真実である。私たちは戦争を「知らない」。歴史的事象として、教科書的記述としてのみ、そのようなことがあったと認知しているに過ぎない。そこには戦争に対する感覚が伴っていない、戦争が全く身体化されていないのだ。

ホブズボームはまさにこのような歴史感覚の断絶という事態を危惧し、先に挙げたような記述を残したのだ。

この度私がシンポジウムにおいて「若者からの提言」として発表させていただいたように大学のゼミである「フィールドワーク“戦争メモリアル”」に参加したのは、まさ

にこのように戦争という歴史感覚が自分の中に全く存在していない、リアリティーが全く伴っていないと痛感したからに他ならない。

それは当然といえば当然かも知れない。私が生きてきた日本のこの20年間を振り返ってみても、そこに戦争のなごり、戦争を想起させるような環境は全くなかった。

目に見えるものが全てであり、「平和」で「豊か」でしかなかった。しかし、だからこそ、ここで戦争が終わることなく相次ぐ現代に、戦争に対して自分が何らかの形で触れる、コミットメントする、考える意味というものは大きいのではないか、そう考えて私はまさにフィールドワークという形で自分の足で、戦争を伝えるモニュメント、博物館等を総称した“戦争メモリアル”に赴き、この眼でそれを見て、そして実際そこで様々な人の話を聞くことで、戦争について考え、みなと意見交換しあった。その過程で日吉台地下壕保存の会の方々とも知り合い、そしてこの度シンポジウムでお話しする機会もいたくことができた。

自分なりにゼミを通じて活動し、戦争に向き合った今、言えることは何だろうか。それはただひたすら「語り継ぐ」ことの意味、大切さである。大学にそのようなゼミがあったこと、それ自体1つの教授からの語り継ぎであったし、またその活動の中で日吉台地下壕保存の会の方々を含め、様々な方からいくつもの語り継ぎがあった。そのような語り継ぎの上に私のこの度報告させていただいた活動は成り立ち、存在していた。だからこそ「若者からの提言」という形で発表しないかというお話をいただいたときに、今度は自分が語ろうと喜んでお受けした次第である。

戦争を単なる1つの「事実」として風化させないこと、私たちの中でそれを少しでも主観的に「真実」として感じること、戦争という歴史感覚をつなぎ止めておくこと、まさにそこに語り継ぐ意味が存在するのではないだろうか。

3. 教育現場で感じた大学生の戦争・平和意識 ～戦争展で発表して～

長谷川曾乃江

1. 発表テーマについて

私は東京都と山梨の大学で非常勤講師をしています。担当科目が「政治学」や「国際機構論」ということから、学期最初の授業では受講生に「どんな社会事象に興味がありますか」等のアンケートを行い、また授業では現実の政治や社会問題にリアリティーをもってもらうため、ビデオを見せて感想文を書かせることができます。こうしたアンケートや感想文を通して知りうる学生達の戦争観・平和観について発表させていただきました。

2. 学生達の問題意識

ここでお話しする学生の平均像は、戦争展に足を運んだり、積極的に戦争・平和について学んでいる若者とは違います。むしろ自分たちの日常とは距離のある政治・社会の動きを知ることが大切だと感じつつも積極的興味や切迫感を抱かずにいる多くの若者です。しかし2001年秋以降、9・11テロや北朝鮮による拉致問題、そしてイラク戦争という衝撃的な一連の出来事によって、彼らも確実に「何か」を感じ、考えているよ

うです。

3. アンケートやビデオ感想文による学生達の戦争観・平和観

その「何か」とは何でしょうか?また、大人の見方とはどうがうのでしょうか?授業では主に核問題(原爆開発~戦後の核軍拡)、冷戦、民族紛争のビデオを見せていますが、それに対して学生達はまず、戦争の大きな破壊力に対して素直に驚き、恐怖を抱きます。また核や他の兵器についての疑問も多くあり、高校までのあいだに核についての科学的知識をきちんと教えられる機会がなかったことがわかります。

次に彼らは戦争によって豊かな日常生活が失われることに非常に敏感に反応します。冷戦下の「ベルリン封鎖」によって食料や生活物資、エネルギー供給を失い、餓死者まで出した西ベルリンの映像に対しては、多くの学生がかなりのショックを受けていました。また民族分断という悲劇も多くの共感を呼んだようです。彼らにとって平和とは何よりもまず物質的、精神的に満たされ、安全を保障された日常そのものなのかも知れません。反対に何故こうした状況が生じたかという社会科学的な疑問はあまり見られません。それよりも人間のモラルという視点から戦争を考える意見や、苦しんでいる人々に対する感情移入が目立ち、戦争に対して道徳的、感情的な判断を下しています。

4. 最後に

こうした特徴の背景には何があるのでしょうか。発表後、フロアから「現在の文科省のカリキュラムでは、戦争や平和についての十分な知識を教える余裕がない」という意見をいただきました。確かに限られた時間の中で、小、中、高の先生方は戦争の悲惨さを教え込むことに専念されてきたようです。また、それが実を結んだからこそ、若者たちには「戦争=悲惨、恐怖、貧しさ、非人間的」という意識が定着しているのでしょうか。しかし、戦後60年近く経ち、国際社会における日本のあり方が問われている今日、未来を担う彼らには現実的・客観的知識も持ち合わせて欲しいと思います。そのため大人である私たち自身もともに学び続けると同時に、戦争とは違う価値観、平和をいかにして創り出していくか知恵を絞らなくてはならない、そんな時代にきていると思います。

講演 「連合艦隊 陸に上がる」

明治大学教授
山田 朗

(講演要旨)

今年度で11回目を数える「横浜・川崎平和のための戦争展2003」では、例年通り日吉台地下壕を歴史学研究や歴史教育、戦争遺跡保存といった視点から捉える講演が行われました。山田朗明治大学教授(日本近現代史・軍事史)による講演は「連合艦隊陸に上る」と題され、①連合艦隊とは、②アジア太平洋戦争における連合艦隊の役割と崩壊過程、③連合艦隊司令部が陸上(日吉)に移った理由という3点に焦点を合わせた内容でした。ここでは当日に配布されたレジメと講演内容をもとに、そのポイントを以下に簡潔にまとめてみたいと思います。(文責:斎藤一晴)

1. 連合艦隊とは

近代日本における海軍の部隊編成は、軍艦が2隻以上で戦隊となり、戦隊が2つ以上で艦隊、艦隊が2つ以上集まると上位組織として連合艦隊が置かれることができます。

連合艦隊という名称は平時編成であった常備艦隊を、日清戦争を契機として戦時編制にした際に設置されたことから始まります。日露戦争では常備艦隊を廃して再編成された第一艦隊・第二艦隊。第三艦隊のうち、第一と第二艦隊で編成された艦隊を連合艦隊と呼びました。以後、第一艦隊の司令長官が連合艦隊司令長官を兼任していましたが、1933年に連合艦隊が平時より常置されるようになると、専任の司令長官になりました。連合艦隊司令長官は、海軍中将、大将から選ばれ、天皇に直隸します。その権限は軍政に関しては、海軍大臣の指揮下にあり、作戦計画は軍令部総長の指示を受けました。また連合艦隊に属する各艦隊の司令長官を指揮すると同時に、連合艦隊司令部のトップでもありました。

2. アジア太平洋戦争における連合艦隊

アジア太平洋戦争開戦時における連合艦艇250隻（約100万トン）と作戦航空機2000機を有していました。これらは、ほぼアメリカ海軍の戦力と互角な数字です。

連合艦隊司令部は、開戦前より独自に真珠湾攻撃を主導しており、海軍全体の作戦計画を指揮するはずの軍令部の意向も引きずる形となっていました。これは日露戦争の日本海海戦において、東郷平八郎率いる連合艦隊がロシア太平洋艦隊を打ち破って以来、連合艦隊司令長官が第一艦隊の旗艦であり、連合艦隊の旗艦でもある戦艦に乗りこんで直接艦隊を指揮するというスタイルが定着し、その発言力や影響力が強まっていたためです。また戦術的にもより大きな口径の大砲を有した艦船によって攻撃し、艦隊決戦によって勝敗を決するというものが一般化されていました。こうして連合艦隊司令部はアジア太平洋戦争において主導的な役割を担っていました。

1941年の12月8日の真珠湾攻撃以降、緒戦は優勢であった戦局も、1942年8月から1943年9月までの約1年間にわたって繰り広げられた、ソロモン諸島のガダルカナル島などをめぐる壮絶な消耗戦によって、日本海軍は戦力を消耗し、優秀なベテランパイロットや航空機など多数を失いました。一方GNP比で日本の約1.2倍にもおよぶ国力を有するアメリカは、着々と戦力を充実させ、戦線に投入していました。こうした圧倒的な戦力差によって、日本海軍は1944年の1年間に、アジア太平洋戦争全体で失った艦艇のうち、喪失した各種艦船の合計トン数で見た場合、実に半数以上

講演 山田 朗 明治大学教授



を失っています。また、1944年末の段階で、日本の空母艦載機の対米比率は、わずか6.4%にまで低下しており、連合艦隊は組織的抵抗力を失ってしまったのです。

3. 連合艦隊司令部が日吉に移った理由

1944年9月29日、海軍は連合艦隊司令部を旗艦大淀から日吉に移しました。こうして連合艦隊は「陸にのぼる」事になるのです。当時すでに1943年10月23日には神宮外苑競技場で学徒出陣壮行会が開かれており、慶應義塾大学で学んでいた多くの学生達は戦場へと駆り出されていました。また1944年7月7日には、サイパンの日本軍守備隊が全滅しており、それ以降、日本全土がB29による本格的な空襲を受けることになるなど、戦局の悪化は誰の目にも明かな状況となっていました。

日吉に連合艦隊司令部が移った理由には、大きく歴史的要因と、環境・設備面での要因とが、考えられます。

まず歴史的要因についてですが、日本海軍が固執した日本海海戦型の連合艦隊の役割はアジア太平洋戦争の推移とともに失われていきました。つまり、大艦巨砲主義に基づいた艦隊決戦ではなく、航空機を中心とした戦術がすでに戦争の中心を担うようになっていたのです。よって、連合艦隊司令部を連合艦隊の旗艦に置くことは、戦術上大きな意味を持たなくなり、かえって最前線に投入された連合艦隊に旗艦を置くことは、通信面や戦術面において不利な影響を与えることもあり、必然的に陸にのぼらざるを得なかったと言えるのです。

次に環境・設備面の要因ですが、①慶應義塾大学の広大なキャンパスとコンクリート建築の強固な建物があり、司令部を移す設備面で条件が整っていたこと。②霞ヶ関にあった海軍省と、海軍横須賀鎮守府とのちょうど中間点に位置する日吉は、交通面で便利であったこと。③海拔40メートルほどの日吉台に司令部を置くことで、通信面の利便性をはかれるという環境面での条件が最適であったためだと言えます。

以上のように、連合艦隊司令部が「陸に上る」ということは、組織的な戦力を失った連合艦隊が行き着いた場所でもあり、また同時に日露戦争以来固執し続けた連合艦隊のあり方を改めざるを得なくなった結果でもあるといえるのです。

(文責：斎藤一晴)

緊急報告

会報66号、68号で詳細をお伝えしましたが、新幹線下の航空本部地下壕入り口4ヶ所の上に計画されている地下室マンションは、横浜市北部建築事務所から建築許可が出される状況になりました。

航空本部地下壕入り口付近の 地下室マンション建設について（続報幸良）

2003年12月17日北部建築事務所から、マンション建設に反対している「日吉の緑と史跡を守る住民の会」（会長八木沢正氏）へ、〈マンション建設業者に対し建築許可を出す〉という連絡がありました。その理由はこれまでマンションに工事車両が進入し、取り付け工事を行うための道路の権利が建設業者になかったことが建築許可を出

す際のネックとなっていましたが、マンションへの進入路の権利を建設業者が取得したことになります。更に緊急避難路がなかったこともネックでしたが、これも設計変更がなされて解決とされ、これら二点の解決によって建築許可が出される見込みとなったということです。

住民の会では北部事務所と建設業者に対し、設計変更が行われたことについて住民に對し説明会を行うことと、それまで許可をおろさないことを要望し、そのことが認められて、近く年明け早々にも説明会が行われる見込みとなりました。

日吉台地下壕保存の会では航空本部地下壕入り口が民有地にあるとは言え、文化庁から近代史跡指定を受ける全国50ヶ所の候補の一つにもあげられた重要な戦争遺跡であり、その文化財としての重要性を文化庁、横浜市文化財課、北部建築事務所、開発・建築業者に対して訴えてきましたが、国が史跡指定する前に一部とは言え、きちんとした学術調査も行わぬまま、マンション建設によって、破壊されることに強い疑問の念を表明せざるを得ません。会員の皆様にもこの問題についてご注目下さいますようお願いし、以上ご報告致します。

(文責：運営委員 谷藤基夫)

2003年度地下壕保存の会記念講演会 慶應大学来往舎 5月17日

追憶の中から～戦時下の日吉キャンパスを語る

最終回

初代日吉台地下壕保存の会会長
慶應義塾大学名誉教授 永戸多喜雄先生

(講演要旨)

昭和17年、2年生になりました。いくつかのグループでそれぞれに育っていったわけです。最初は一日だけ軍関係の工場に行きました。我々が行ったのは小田原の工場でした。一日そこで作業をさせられました。2年生になると友人つきあいの深さが深まって行きます。私はサグリ君という人物と親しくして始めました。彼は戦後定年まで慶應でフランス語の教員をしていました。私も彼もフランス文学を好んで読んでいました。昭和17年にもなるとだんだん先生方も元気が無くなっていました。しかし当時ヒットラーの記録を嬉しそうに翻訳していた教授も中にはいたようでしたが・・・。私の日記にこのころの記録が残っています。「高橋ヒロエ氏の話。私は学校に勇んで来ることができない。学生に霸気がない。願わくば私は村長になりたい。田舎の青年は諸君より生き生きしている。」と愚痴をこぼしていました、と書かれています。

さてまた話は戻ります。それから1ヶ月もたたないうちに「青馬」というタイトルの同人雑誌が発行されました。さきほどあげた3人の出版です。我々の同級生であったほかの人の名前も連ねてありました。それから昭和18年の2月には第2号が石山コウイチ君の詩と同じ「青年の構想」というタイトルで出版されました。すぐに彼らは勢いに乗って第3号を発行しようとしていました。しかし間もなく役所から電話がありました。「こんなくだらん雑誌に非常時の紙を使わせることはできない。」そしてついに第3刊は出ませんでした。

当時刊行物への干渉はとてもひどいものでした。わたしの父も記者でした。父は警察から前科一犯を受けました。結婚観について書いた記事でした。

日吉の学生寮の機関誌「くるみ」という雑誌に載った内容がけしからんと神奈川県から呼び出され、こんなもんはのせるなど、寮の学生の書いた機関誌の制作文まで削除されました。学生が書いた文章まで審査されていたのです。

やがて太平洋戦争に突入しミッドウェイ海戦がありました。それが終わった後で休暇で帰ってきたのですが、日本軍がやられてしまったという話を聞きました。予想通りになってしまっているなど私たちは嘆きました。

夏休みにはいるか入らないか・・7月でした。海軍航空隊が厚木に基地を作るということで地ならしに行きました。その前にあらかじめ身体検査を医学部で行い、AとBにあてられた健康な人がそこで地ならしをしました。私はそこには漏れました。授業というのは勤労先に講師が出張して、そこで講義をしていました。予科も半年短縮されて、三田には秋に行くことになりました。

徴兵猶予がなくなると発表されたのが10月の始めて、陸軍の方はすぐに入営ということでした。10月からわずかな期間に徴兵検査を受けて、それぞれの運命が決められました。それに漏れた人達は勤労奉仕をするというものでした。日吉に関してはそれくらいのことしか私にはなく、別の人気がここに話に来て欲しいと思っています。

19年秋に海軍の多くがこの日吉にやってきました。その後、この日吉キャンパスが再び使えるようになったのは昭和24年の12月くらいでした。今この来往舎が立っているところには藤原工業大学の校舎が何棟も建っていました。しかし殆どが焼けてしまいました。三田も50%焼けました。そんなわけで再びこのキャンパスにやってくるのは昭和24年になってしまいました。

話がだんだんと飛び跳びになってしまいご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。申し上げたいことはいっぱいございますが、あまり話すと分散してしまいますので、こらで話を終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

(文責: 谷藤基夫)

活動の記録

※8/21~9/23 地下壕への歩道工事のため見学中止

9/16 第3回運営委員会 会報68号発送 (慶應高校物理教室)

9/25 川崎市立中学校教頭会見学会 50名

9/26 横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会 (法政第二高校)

9/27 神奈川労連見学会 42名

10/2 宮城県内町会議員有志見学会 15名

10/5 千代田区出版労働者の会見学会 15名

10/6 第4回運営委員会 慶應高校物理教室

※地下壕の一部に漏水が見つかり、調査、整備のため10月中の見学会は中止。

10/18 横浜・川崎平和のための戦争展準備 (慶大日吉キャンパス来往舎)

10/19~26 戦争展開催

10/19 連合三田会開催下の展示会 見学者約2000名

(12)

2004年1月15日 第69号

- 10/25 日吉キャンパス・ウォーク (地上部のみ) 参加15名
櫻井準也慶應大学助教授講演、若者の発表
(慶應日吉キャンパス来往舎) 50名
- 10/26 日吉キャンパス・ウォーク 参加7名
山田朗明治大学教授講演 (慶應高校日吉校舎) 60名
- 11/5 横浜市立日吉台小6年 70名
- 11/7 慶應高校 (日吉) 3年 46名
- 11/8 戦争展日吉台地下壕見学会 80名
- 11/9 戦争展登戸研究所見学会 12名
- 11/12 横浜市立 港北小 100名
- 11/13 横浜市立下田小 98名
- 11/15 三島教職員組合見学会 18名
- 11/16 神奈川県歴教協 38名
- 11/18 横浜市社会科教育教員有志 4名
- 11/19 第5回運営委員会 (慶應高校物理教室)
- 11/23 定例見学会 (雨天のため中止)
- 11/29 セカンド・ライフ見学会 37名
- 11/30 戦争展東部62部隊見学会 (雨天のため中止)
- 12/11 第6回運営委員会兼忘年会
- 12/14 戦争展見学会・定例見学会 42名

■予定 2004年1/15 (木) 第7回運営委員会 (会報69号発送作業)
(慶應高校物理教室)

1/24 (土) 定例見学会

▲定例見学会は毎月第4土曜日に変更になりました。なお日程が変わる場合もありますので、必ず見学窓口に申し込んでください。

(TEL&FAX 045-562-0443 喜田)

連絡先 (会計) 白鶴邦子: 神奈川区白幡向町20-49 045-402-9090

(見学会・その他) 喜田美登里: 港北区下田町2-1-3 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://www.geocities.HeartLand-Hanamizuki/2402>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921
代表 大西章 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会
編集 日吉台地下壕保存の会
運営委員会